
東方複装目

一年柚希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方複製目

【Nコード】

N2989Q

【作者名】

一年柚希

【あらすじ】

青年がふと気がつくと、草原の真ん中だった。

周りには何も見あたらず記憶も無い。在るのはその身と名前、そして能力だった

そんな青年が過去の世界を東奔西走する！

始まり（前書き）

はじめまして、一年柚希です。

祝初投稿？

ただ、ぶっちゃけなくても駄文ですので予めご了承ください。

始まり

しこうがかすむ。
なにをしていた？
どこにいた？
なにがある？
じぶんはだれ？

靄がかかった思考。霞んで見えない視界。
上を向いているのか、横を向いているのか。立っているのかさえも
判らない……………。

どれくらいそうしていたのだろうか。
突如軀に衝撃が走る。

足が脚が腕が手が爪が肩が首が頭が骨が血が筋が目が鼻が耳が脳が
腸が血管が神経が細胞が

軀の何もかもがギシギシギシギシギシギシギシギシギシギシギ
シギシギシギシギシギシギシギシギシギシギシギシギシギシギ
シギシギシギシギシギシ

キシミナガラチガウナニカニカワツテイク

「ん……………」

頬を撫でる心地好い風で目が醒めた。

目覚めの気たるさが残るまま、柔らかな芝から上体を起こした。

「・・・芝？」

そう、芝だ。布団どころか床ですら無い。

慌てて周囲を見るが、見渡す限り草原が続いている。薄く雲がかかっているが、陽は真上にあつて暖かい。春なのだろうか…………

「ってそうじゃない。まず、何故自分が此处にいるかだろう」

自分にツツコミながら考える。

服は、黒いズボンに黒いコート。中は白いシャツに鉄製の・・・胸当てに手甲？。

こんなもの着けてたか？

怪我は無し。身体の不調も無い。

「ふむ、服装以外に異常は無い・・・みたいだな。」

冷たい風にふと気付くと、先程まで照つてた陽が雲に覆われていた。

「…雨が降りそうだな」

一先ず何処かへ行こうと立ち上がる。

此処が何処か分らない以上適当に歩くしかない。
近いうちに何かあることを願いつつ歩き始めた。

あれから三日は経っただろう。

歩いてくと森を見つけた。

雨も降り始めていたので、一際大きな木にもたれ掛かり此処にいる理由を考え始めた。

しかし、いきなり躓いた。

何せ記憶が無かったのだ。

必死に思い出そうとして、見つけたのは名前と少しの知識のみ。自分が何処でどんなふうに着、何をしていたのか分からない。

その事にシヨックをうけたが、一先ず分かる範囲で整理してみた。

名前は、神無。かな、と読むらしい。

そして、言葉と料理方法。食物に関するものの知識。

これに関しては有難い。生きていくのにいるものは揃っている。

しかし、そのみ。

これからどうすればいいのかわからない。

とりあえず、雨も止んだし散策でもしてみようか。

…驚いた。

歩き始めて2日。やっと人を見つけた。

森の中にいた彼に話しかけようと近づいて、その持ち物が目についた。

遠目にみて、彼はボロボロの服とも言えない物を着ていて、明らかに自分のとは様式がちがう。さらには、手に網目の土器を持ち木の実等を採っていた。

知識にある、現代とはかけ離れてる。

「・・・今、何年だよ？」

発覚／放浪（前書き）

書き直しました。

いろいろと無茶がありますが、この駄文をよろしく願います。

発覚／放浪

うろつき始めて更に経った。最早あれからどれだけ経ったのかすらわからない。

今がいつ頃なのか知るためにいろいろと見て回った。
どうやら『知識』にある『縄文』と呼ばれる時代みたいだ。

本当に自分は何者なのだろうか。

これはある日のこと。

いつもと同じように歩きつつ記憶を探っていたら、頭痛とともにある言葉が脳裏に思い浮かんだ。

『解析し、再現・複製する程度の能力』

なんでも、観たものを無意識下で構造、構成、年月、経験、工程を読み取り、それを蓄え、自由に創り出すことが出来るらしい。
じゃあ、何が解析できるのか？
試しに自分の体に解析をかけてみた。

身体年齢、18歳。但し、妖怪化に伴い不老。

身体能力、妖怪化に伴い大幅に上昇。

妖力、妖怪化後100年経過により増大。

■■■■、■■■■■■■■、使用不可。

能力、解析は8割使用可能。再現については5割使用可能。但し、過度の能力使用は脳への負担大のため要注意。又、金属以外に対する使用は十全時の6割以下。
強化使用可能。

.....

「.....妖怪だと？」

妖怪？自分は人間じゃ無かったのか？。

■■■■■？何だよソレ。

何が何だかわからん。

一先ず、妖力とやらを使いこなそうか・・・。

.....

妖力を使い始めて数十年経った。

今も山を越え海を越え、世界中をまわっている。

その途中、いろんな人（？）と出逢った。

友になった者もいたし、敵対した者もいた。

中でも一人称が^{オレ}我が半神半人や、十二の試練を乗り越えた神の息子

などと仲良くなった。

月夜が綺麗なら酒を酌み交わし、幾度となく刃を交えた。
最初こそ全く歯がたたなかったが最後の方では五分五分だった。

最初に会った頃のギルガメッシュは小さくて確りした子供だったんだがなあ……。いつからか傲岸不遜な奴になっていた。

ギルと死に別れてしばらくしてヘラクレスと出逢った。

彼奴とはかなり意気投合した。

仲良くなった記念(？)に武器を造って、あげた。ギルの宝物庫を見たから武具なら殆ど創れるので、ヘラクレスにあいそうなモノを見繕って、『再現』した。

気に入ったのか、その斧剣を使ってるのを何度も見かけた。

.....

ヘラクレスとも別れて暫く経った。

今も世界中を旅している。

一人旅は存外暇なもので、噂を耳にしてはその真偽を確かめ、その地の酒を呑む。そんな気ままな時間を過ごしていた。

ある時、たまたま行き着いた村でこんな噂を聞いた。

曰く、「北の森の中にある城の玉座に、綺麗な聖剣が刺さってる。
誰にも抜けず、それを欲した王の遣いにも抜くことは出来なかった。」

その話を耳にした俺は、何かにとり憑かれたように真っ直ぐその城

へむかった。

俺が目にしたものは、光輝く一振りの剣。
これを目にして、ああ、確かに聖剣だ。と思った。

森を抜けた先にあり、長い間雨風に晒され寂れた古城。蔦が張り、
苔が生え、ボロボロになった内装。嘗て玉座があったであろう場所
にある台座。

周囲とは違い草木を寄せ付けず、窓から入る木漏れ日を浴び、確かな存在感を感じる一振りの剣。
その幻想的な光景に思わず見とれてしまった。

しかし、その剣を一目視た途端に理解した。これは、自分の為に鍛えられた『魔剣』であると。

そしてその剣を引き抜いた瞬間、俺の意識は乗っ取られた。

教えてくれ。俺はあと何回あの子とあの子犬を殺せばいいんだ・・・（前書き）

遅くなってすみませんでした。

いろいろと無茶がありまくる設定ですが、よろしくお願いします

教えてくれ。俺はあと何回あの子とあの子犬を殺せばいいんだ・・・

世界には魔術師がいる。

彼らは魔術を秘匿し、子供にも継がせる子以外には教えない。

只ひたすら研究し、己の目標を目指すのみ。

その目標は『』。根源と呼ばれ、世界の外側にあるとされる、あらゆる出来事の発端となる座標。

万物の始まりにして終焉、この世の全てを記録し、この世の全てを作れるという神の座。

その根源に至れば魔術では為し得ない奇跡、『魔法』を使うことができる。

無の否定

平行世界の運営

時間跳躍

魂の物質化

どれもヒトの身には過ぎた力で、星のバランスを崩しかねない。

『ガイア』

それは、星の意思。ヒトを恐れ、星を守るために霊長を殺すことをいとわない。

俺はそのガイアに創られた存在だ。しかし、本来星が生み出すのは真祖と呼ばれる吸血鬼のはずだった。

世界と繋がることは出来るが、空想具現化は使えないし、吸血衝動は全くない。

そのため『ガイアの欠陥品』、『真祖のなりそこない』などと呼ばれている。

だが、結局はガイアに創られた存在。星を守るために、自分の意思とは関係なく殺すことを強要された。根源に至りかけた魔術師を殺した。魔術に関係なくても、殺害対象に関係あれば殺した。

魔術師を殺すために村を滅ぼし、たった一人の少女を殺すために町を焼き払い、善政をしていた王の為に国を壊滅させた。

あの剣は俺が鞘であるかのように体内へと消えた。

心が傷付いていくなか、能力を使わなかったのは最後の抵抗。彼等との思いではこんな血で汚したくない。それだけだった。

その代わり手にしたものは一振りの鎌。

これだけを振るい、斬って斬っ斬りまくる……。いつしか血を吸いすぎた鎌は能力を得た。

カラダハケンデデキテイル

そう、一振りの剣。だから心は折れず、（ココロガイタイ）何も感じない。（コロシタクナイ）

そう、何度も何度も（セメテ……）己に言い聞かせた（………コロシテクレ）。

ガイアに使われるのは対象が現れた時のみ。だが、心を蝕まれた俺

はソレ以外の時以前の様に過ごすことは出来なかった。

.....

ここは、どこだろうか。

フラフラ歩いて辿り着いた国。

争いが絶えないこの時世の中、それなりに栄えている。

この国に来て数日、俺は一人の魔術師の元にいた。

なんでもその魔術師、マーリンは俺が来ることを予見していたらしく、今回は害が無いことも知っていたらしい。

その上で俺が死んだような目をしている(らしい)ことに興味を持ち、話しかけてきた。

彼の元に留まって数日、選定の剣の話聞いた。

その剣を抜ければ選ばれた王になれる。

だが、数多の騎士達が挑戦したが、誰一人として抜くことは出来なかったらしい。

その場へと向かうとそこにはマーリンと一人の少女がいた。

彼女こそマーリンが予見した剣を抜く者らしい。

「この剣を抜くと人として、女性として死ぬことはできない。それでも抜くか？」

彼の問いにも彼女は折れず真っ直ぐに抜くと言った。

多分俺はその時に彼女の真っ直ぐな瞳に惚れたのだろう。自分が持つことの出来なかったそれに。

俺は迷うことなく剣を抜き放った彼女の前に跪き、彼女の騎士になった。

それから王の元で幾度となく戦場を駆け抜けた。

同じ騎士の友もできたし、更に剣技を磨くこともできた。

そしてなにより前線にでて勝利に導いた王が、黄昏に染まった丘の上にたたずむ光景がとても美しく心に残っている。

彼女は完璧だった。剣の腕は凡百の武将達より強く、その軍略は並みいる軍師を抜き、兵の統率も優れていた。

彼女は誰よりも戦争が上手かった。だが、彼女は戦争に向いてなどいなかった

彼女は優しすぎた。だから、誰よりも傷つき続けた。

それでも、戦い続けた。そうしなければ、民を侵略者から守れなかったから。

同時に民のために最少の犠牲で残りを救うべく、一を切り捨て続けた。

例えば、侵略者に食糧を渡さないために一つの村を焼いた

だがそれは部下に、他の騎士達には良くとられなかった。

『王は人の心が分からない』

王はただ国を、民を守りたかったただけだったのに。次第に王と騎士達はすれ違い始めた。

円卓で始めて出来た戦友ラインスロット。彼は王妃であるグィネヴィアと惹かれあい、裏切った。

覆面の騎士モルドレッドは離反し、戦いの末王に討ち取られた。

もはや円卓が瓦解していた。そんな最中におきた戦争で王は死んでしまった。

俺は彼女にすぐわれていた。

殺戮の日々に荒んでいた心を癒された。

逃れられないなら、せめて自由な時に助けられる命を助けよう。

叶うならば彼女のような人間に再び逢えるように・・・

I am the bone of my sword .

《体は刃で出来ている。》

Steel is my body , and fire is my blood .

《血潮は鋼で、心は硝子。》

I have created over a thousand blades .

《幾たびの殺戮を越えて不変。》

Unknown to shape . Nor known to hide .

《ただ一度の勝利もなく、ただ一度の救済もなし。》

Withstood pain to create weapons .
Setting a oath with my soul .

《担い手は黄昏の丘にて 嘗ての誓いを鉄と鍛つ。》

So , those hands will ever takes

redems.

《故に、彼の生涯に救いはあり。》

My soul wish was unlimited bla
de works.

《この心は無限の剣で出来ていた。》

教えてくれ。俺はあと何回あの子とあの子犬を殺せばいいんだ・・・（後書き）

・・・東方？寧ろ型月という

次からは妖怪を出す！

主人公の鎌の名前が決まらない。

『定められた殺戮の刃』

みたいなのにしたいけど…。

……………だれか読んでるのかなあ？

設定（前書き）

次との時間稼ぎとして投稿します。

まだこの先も書き足していくと思うので。

・・・宝具もヒロインも決まらない（泣）

設定

主人公

神無―カンナ―

【筋力】 B

【魔力】 C

【耐久】 B

【幸運】 D

【敏捷】 B

【宝具】 A

星に生み出された霊長の敵対者。

真祖ではないので、空想具現化はできないが、侵食という形で固有結界をつかえる。

普段は星と繋がっておらず、固有結界を展開するのに詠唱が必要。星から干渉される時と自ら接続するときは自由につかえる。

東方の面で、『解釈し、再現及び複製する程度の能力』は、他人の能力、技術などにも適用されるが、ランク（精度）は下がる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2989q/>

東方複装目

2011年10月8日15時40分発行